

江東区とうきょうすくわくプログラム活動報告書

| | |
|-------|-------------|
| 施設所在地 | 江東区有明1-2-12 |
| 施設名 | みらいく有明園 |

1 活動のテーマ

〈テーマ〉

運動

〈テーマの設定理由〉

近年の子どもたちの運動機能能力低下について学び自園においても感じる部分が強かった。子どもたちは散歩に行き広大な広場で走り回っても衝突、転倒などの様子があり気になっている。また子どもたちの「速く走りたい」「鉄棒・跳箱ができるようになりたい」という声が多く聞かれるようになりそれらを叶えるためにはどのように準備をするべきかを話し合いテーマを決定した。

2 活動スケジュール

■1歳児：子どもの「登りたい・潜りたい」という欲求を起点に、巧技台やマットを使った環境を構成し、年間を通して遊びを楽しんだ。
■2～4歳児：外部の専門家からの実演研修、座学研修を毎月1回取り入れ、子どもの興味関心から運動遊びを展開する方法を学んだ。
■5歳児：近隣の体育館を活用して、広い空間での運動遊びを実施した。
月1回、専門家による実演を交えた研修を受けた翌日からは積極的に日常の中に、学んだ運動遊びを取り入れるように意識し実践していった。
4月、5月、6月：移動系の動き（あるく、はしるなど）
7月、8月、9月：バランス系の動き（たつ、まわるなど）
10月、11月、12月：操作系の動き（なげる、うつなど）
1月、2月、3月：力試し系の動き（ひく、おすなど）

3 活動のために準備した素材、道具及び環境の構成

マット、巧技台、跳箱、鉄棒、はしご、ネット、平均台、軍手、ビブス
多目的室、ホール、クラスを使用して設定。

4 探究活動の実践

〈活動の内容〉

外部の専門家による研修で学んだ「幼少期に経験しておきたい36の基本動作」を取り入れた環境設定方法を実践し、子どもたちが主体的に自由に運動できるように準備した。部屋を分割して、プレイゾーンでは巧技台、平均台、はしごなどを設定して自由に探求する場所を設け、保育士は危険がないようにサポートをしたり、子どもの様子や「ここを繋げたい」などの声に合わせて設定を変えていく。チャレンジゾーンでは跳箱、鉄棒、ビブス、タオル、軍手、コーンなどを用意をして、保育者からの「こんなことができる？」という問いに子どもたちが自分で考え工夫し挑戦する姿が見られた。

〈活動中のこどもの姿、声、子ども同士や保育者との関わり〉

「何回できたよ」「ここをもっと高くして」「跳ぶよ」「ここをこうしてみよう」など自分の意思を伝えたり相手に伝えて一緒に取り組む姿も見られた。根気強く自分が納得するまでチャレンジしたり、友達の活動を見て真似をしてみたり、展開をする場面も見られた。「36の基本動作」を掲示してあるので自身で確認してポーズを取ってみる姿も見られた。保育士に援助を求めて自身ができるところまでチャレンジをしたり、保育士と一緒に何度も繰り返し楽しんで活動する場面もあった。保育士はリスクとベネフィットを意識して設定を変えたり、見守ってみたり試行錯誤を繰り返しながら実践していた。活動のあった日は帰園時に保護者へ様子を伝える子どもの姿もあった。



5 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

先生が意識を持ち環境設定を行うことで子どもたちは自身で考え行動することができる。自分のアイデアや思いを伝えられるような対応の仕方での保育をすることができた。褒めるだけではなく認めることで次へと展開ができる。専門家の訪問日で得た気づきを日常の保育から取り入れていくことで、保育者自信も主体的に「基本動作を意識した運動遊び」を展開できていた。